

博士学位論文審査要旨

2012年6月27日

論文題目： 絵本共有が母子相互作用に及ぼす効果の実証的検討：
母子関係および子どもの社会性発達の視点から

学位申請者： 佐藤 鮎美

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 内山 伊知郎

副査： 心理学研究科 教授 神山 貴弥

副査： 心理学部 准教授 興津 真理子

要 旨：

本稿では、一般的に母子関係の質や子どもの社会性発達を向上させると考えられている絵本共有の効果を実証的に検討した。第一部では、乳児期において絵本共有場面と他の遊び場面の母子相互作用を比較することで、母子関係や子どもの社会性発達に影響を与える絵本共有の特異性を検討した。第二部では、乳児期から幼児期後期にわたって絵本共有時間を操作的に増加させた母子を追跡調査することにより、絵本共有のもつ縦断的效果を実証的に検討した。

まず第二章第一節の研究では、生後9ヶ月児とその母親を対象に、絵本を用いて遊ぶ場面と特別なツールを用いない自由遊び場面の母子相互作用の検討を試みた。母子相互作用として、安定した母子愛着をもたらすとされる母親の応答性 (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978) の重要な下位構成概念である「子どもの行動と母親の反応の時間的接近」および「子どもの感情をうまく対処する反応」(Paavola, Kempainen, Kumpulainen, Moilanen, & Ebeling, 2006) を検討することとし、それぞれ「母親が子どもの行動に随伴して働きかける頻度」および「子どもの意図と一致した働きかけの頻度」を指標とした。また、母親が積極的に子どもの注意を促す「受容的共同注意」と子どもが積極的に母親の注意を促す「協応的共同注意」エピソードを測定した。その結果、母親が子どもの意図と一致した働きかけを行う頻度が自由遊び場面に比べて絵本共有場面でより高いことが示された。

第二章第二節においては、絵本共有場面および自由遊び場面に加え、生後9ヶ月児の遊びの中で一般的に広く用いられるおもちゃを使用した遊び場面を設定した。その結果、母親が子どもの行動に随伴して働きかける頻度および子どもの意図と一致した働きかけの頻度は、おもちゃ遊び場面に比べて絵本共有場面および自由遊び場面で高かった。このことから、絵本共有場面と自由遊び場面においては、母親の応答的な働きかけがより多く生じることが示された。

続いて、第二部である第三章では、生後9ヶ月の乳児とその母親を対象に、絵本共有時間を操作的に増加させた絵本群と特に何も教示しない統制群を設定し、絵本共有増加期間の前後にあたる生後9ヶ月および12ヶ月時の母子相互作用を比較検討した。母親が子どもの行動に随伴することと、意図を読み取り感情をうまく扱う両側面が必要な「賞賛」行動を指標として用いた。その結果、母親の賞賛と子どものほほえみは絵本群で有意に増加した。また、受容的共同注意は絵本群において有意に増加した。母親が積極的に子どもの注意喚起をしたことから、子どもが母親の注意喚起に従う能力を発達させたという可能性、また母親が子どもの注意を喚起するスキルを上達させた可能性の双方が示唆された。

第四章では、絵本共有の効果を追跡調査し、生後30ヶ月時における母子相互作用を比較検討

した。その結果、母親の賞賛回数には両群の差が見られなかったが、子どものほほえみ回数は統制群より絵本群でより多く見られることが明らかになった。

以上のことから、絵本共有場面では母子相互作用が頻繁に生じることが示唆された。さらに、絵本共有量を増加させることにより、絵本共有場面以外においても母子相互作用が増加することが示され、母子関係の質を向上させる可能性、また子どもの社会性発達を促進させる可能性が示唆された。

よって、本論文は、博士(心理学)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2012年6月27日

論文題目： 絵本共有が母子相互作用に及ぼす効果の実証的検討：
母子関係および子どもの社会性発達の視点から

学位申請者： 佐藤 鮎美

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 内山 伊知郎

副査： 心理学研究科 教授 神山 貴弥

副査： 心理学部 准教授 興津 真理子

要 旨：

上記審査委員3名は、2012年6月2日午前9時30分から約50分に及ぶ博士論文公聴会の後、約2時間にわたり、学位申請者に面接諮問を実施した。提出された論文に対する質疑に対して、適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的な価値が確認された。また、母子相互作用に関する心理学はもとより、心理学全般にわたる専門的な知識を十分に有することが確認された。また、引き続き実施した語学試験（英語）についても十分な学力を有することが確認された。

以上より、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 絵本共有が母子相互作用に及ぼす効果の実証的検討：
母子関係および子どもの社会性発達の視点から

氏名： 佐藤 鮎美

要旨：

本稿の研究は、一般的に母子関係の質や子どもの社会性発達を向上させると考えられている絵本共有の効果を実証的に検討したものである。本稿の前半、第一部では、乳児期において絵本共有場面と他の遊び場面の母子相互作用を比較することで、母子関係や子どもの社会性発達に影響を与える絵本共有の特異性の抽出を試みた。本稿の後半にあたる第二部では、乳児期、幼児期前期、幼児期後期にわたって絵本共有時間を操作的に増加させた母子を追跡調査することにより、絵本共有が母子関係や子どもの社会性発達に関連する母子相互作用に及ぼす効果を実証的に検討した。

まず第一部の研究から紹介する。第二章の第一節では、生後9ヶ月児とその母親を対象に、絵本を用いて遊ぶ「絵本共有場面」と特別なツールを何も用いない「自由遊び場面」の母子相互作用を比較検討することで「絵本がある」場面と「絵本がない」場面の差異の検討を試みた。母子関係の質の向上に関連する母子相互作用としては、安定した母子愛着をもたらすとされる母親の応答性 (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978) の重要な下位構成概念である「子どもの行動と母親の反応の時間的接近」および「子どもの感情をうまく対処する反応」(Paavola, Kempinen, Kumpulainen, Moilanen, & Ebeling, 2006) を検討することとし、それぞれ「母親が子どもの行動に随伴して働きかける頻度」および「子どもの意図と一致した働きかけの頻度」として測定した。また、1歳以降の絵本共有場面においては、母親が積極的に子どもの注意を促す共同注意が多く出現することが報告されている(菅井・秋田・横山・野沢, 2010; Yont, Snow, & Vernon-Feagans, 2003)。そこで、両場面において、母親が積極的に子どもの注意を促す「受容的共同注意」と子どもが積極的に母親の注意を促す「協応的共同注意」(Bakeman & Adamson, 1984) に分けて共同注意エピソードの頻度を測定した。両場面におけるこれらの頻度を比較した結果、母親が子どもの行動に随伴して働きかける頻度に差が見られなかったものの、子どもの意図と一致した働きかけの頻度において自由遊び場面に比べて絵本共有場面でもより高いことが示された。また、子どもの社会性発達に関連する母子相互作用については、受容的共同注意の頻度が自由遊び場面に比べて絵本共有場面でも高かったが、協応的共同注意の頻度は差が見られなかった。よって、母子関係および子どもの社会性発達に関する母子相互作用は、部分的に絵本共有場面において増加することが示された。しかしながら、第一節の研究には、幾らかの手続き上の問題が存在したため、得られた結果を完全に妥当なものであるとみなすことができなかった。

そこで、第二節においては、これらの問題点を改善した手続きにより研究を実施した。具体的には、場面間に適切なインターバルを設け、母子相互作用の頻度を測定する時間を増加させた。さらに絵本共有場面および自由遊び場面に加え、生後9ヶ月児の遊びの中で一般的に広く用いられるおもちゃを使用した「おもちゃ遊び場面」を設定した。なぜならば、第一節の比較だけでは「絵本がある」効果ではなく「対象がある」効果を検討している可能性も否めないからである。そこで、第一節と同様の指標によりこれらの場面における母子相互作用を比較検討した。その結果、母親が子どもの行動に随伴して働きかける頻度および子どもの意図と一致した働きかけの頻度については、絵本共有場面と自由遊び場面で差が見られなかったが、おもちゃ遊び場面に比べ

て絵本共有場面および自由遊び場面の頻度が高かった。このことから、絵本共有場面と自由遊び場面においては、母親の応答的な働きかけがより多く生じることが示された。受容的共同注意および協応的共同注意については、自由遊び場面よりもおもちゃ遊び場面、おもちゃ遊び場面よりも絵本共有場面において頻繁に生じていることが示され、対象がないよりもある方が共同注意は生じやすいが、対象の中でも絵本が特に共同注意を生じさせやすい可能性が示唆された。

続いて、第二部の研究について紹介する。第三章では、乳児期において絵本共有が母子関係や子どもの社会性発達に関連する母子相互作用に与える効果を検討するため、生後9ヶ月の乳児とその母親を対象に、絵本共有時間を操作的に増加させた絵本群と特に何も教示をしない統制群を設定し、絵本共有増加期間の前後にあたる生後9ヶ月および生後12ヶ月時の母子相互作用を両群で比較検討した。母子関係に関連する母子相互作用に関しては、母親が子どもの行動に随伴することと、意図を読み取り感情をうまく扱う両側面が必要な「賞賛」行動を応答的働きかけの指標として用いた。賞賛の多い母親の子どもは自分の遊び行動達成後にほほえみを表出することが多い (Stipek, Recchia, & McClantic, 1992) ことから、子どもの「ほほえみ」の頻度も母親の応答的働きかけの指標として用いた。また、子どもの社会性発達に関連する母子相互作用に関しては、第二章と同じく受容的共同注意および協応的共同注意の頻度を測定した。母子相互作用を観察したのは Stipek et al. (1992) が用いたのと同様のおもちゃを使って遊ぶ自由遊び場面であった。これらの頻度を両群で比較検討したところ、母親の賞賛と子どものほほえみは絵本群で有意に増加し、生後12ヶ月時において統制群より絵本群の方が有意に多い結果となった。また、受容的共同注意は絵本群において有意に増加し、生後12ヶ月時において統制群より絵本群の方が多い結果となった。母親が積極的に子どもの注意喚起をする共同注意エピソードが増加したことから、子どもが母親の注意喚起に従う能力を発達させたという可能性、また母親が子どもの注意を喚起するスキルを上達させた可能性の双方が示唆された。協応的共同注意においては両群ともに月齢ともなってエピソード数を増加させており両群間に差が見られなかった。子どもが積極的に注意を喚起する共同注意は生後12ヶ月前後で著しく発達するため、子どもの成熟による変化が大きく、介入の効果が出現しにくくなってしまったと考えられる。

第四章では、幼児期前期において絵本共有が母子関係に関連する母子相互作用に与える効果を検討するため、第三章の研究に参加した絵本群および統制群の母子を追跡調査し、生後30ヶ月時における母子相互作用を両群で比較検討した。母子関係に関連する指標としては第三章と同じく母親の賞賛と子どものほほえみを用い、第三章と同様に Stipek et al. (1992) の用いた自由遊び場面において母子相互作用を観察した。なお、共同注意については発達する時期が極めて限られており生後30ヶ月では既にその発達が終えられているため検討しなかった。これらの行動の頻度を両群で比較検討したところ、母親の賞賛回数には両群の差が見られなかったが、子どものほほえみ回数は統制群より絵本群でより多く見られることが示された。幼児期以降のほほえみは他者が自分に関心に向けていることを示すという論拠が報告されていること (e.g., Eckerman & Rheingold, 1974, Jones & Raag, 1989) から、賞賛頻度に差が見られなかったものの絵本群の母親の方が子どもにより関心に向けている可能性が示唆できた。

以上のことから、絵本共有場面では他の遊び場面に比べて、母子関係や子どもの社会性発達に関連する母子相互作用が頻繁に生じることが示唆された。さらに、絵本共有量を増加させることにより、絵本共有場面以外の遊び場面においてもこれらの母子相互作用を増加させることが示され、そのことが母子関係の質を向上させる可能性、また子どもの社会性発達を促進させる可能性が示唆された。本稿の研究は絵本共有が及ぼす効果について実証的に検討した研究の第一歩であり、絵本共有が母子関係や子どもの社会性発達に効果をもたらすメカニズム解明の一助となることが期待される。